



開業顛末記



島尻キンザー前クリニック 島尻 佳典

4年前渡久山博美先生から手伝ってくれないかという電話がありました。一人での切り盛りが大変だったと思います。その後パタパタと状況が変化し、リタイアしたいと言う話になりました。地域に根ざして25年間親しまれた整形外科を閉じてバトンタッチすると言います。郷土の先輩医師、親戚の誇り、と言うだけでなく同じ医師を生業とする者として今まで活躍してきた分、悠々自適な生活を送って欲しいと思いつ話を進めました。今、時々顔を合わす博美先生は元気に過ごしています。

箱物がありましたのでいわゆるテナント開業です。内装工事のため借金もしました。なかば引き継ぎなので職員の確保には苦戦しませんでした。小規模なためスタッフが一丸となりやすく、小回りも利き、患者さんを身近に感じています。思っていたより経営は厳しいのですが、専門性を前面に出しましたのでお蔭さまで患者数は徐々に伸びてきています。逆に「インフルエンザは診れますか?」とか「風邪なので今日の診察はお休みにします。」と連絡して来る患者さんもいて苦笑しています。

開業する噂が流れると業者がアプローチしてきます。業務の合間にやり取りをしたり、慣れないコンピュータの話の聞かなければなりません。私は幸いなことにコンピュータが得意な者を事務長に擁立することができましたので全部一任しました。彼も仕事をしていましたので大変だったと思います。よくやってくれて電子カルテもクリニックに見合ったものを選ぶことができました。端末の数、データの整理・アウトプットのやり易さ、レセコン一体型などに照準を合わせて選択しました。これからは医

事課業務やデータ管理など全てがIT化ですので、できればコンピュータに詳しい方を最初から置いておくことで医師の負担は軽減されると思います。

とは言えオープンまでの1カ月は電子カルテパニックに陥りました。そのまま使えるものと高をくくっていたからです。マスターメンテと言うものをしなければなりません。私には初めて聞く言葉でした。院内で使用する注射・点滴、薬の名前とミリ数・用法などを一から入力して行く作業です。病院ではシステムの人がやっているようです。業者に泣きついた甲斐あって内服薬の9割近く入力してもらいました。しかし、注射、処置などはクリニックの運用の関係もあるので自分で入力しなければなりません。インスリンと血糖測定付属器の名称、用法などの入力は複雑です。専門であるがゆえに気を使いました。どんな種類を置こうか、職員は理解して進行できるか、検査に不備はないか、など他にも気が抜けない日々が続きイライラしました。

初日の2010年9月1日は折しも暴風雨でした。国道58号線沿いは風が猛烈に強く、嵐の出港に不安がよぎりました。業者さん待機のもと、シミュレーションも何度かやったので現場はスムーズでした。患者の殆どは父方母方門中という沖縄らしい外来で、最初の患者総数は11名の幕開けでした。

開業で自慢できるのは職場を提供している点でしょうか。病院が存続できる第一の条件は医師が存在することですから勤務医でも同じだと思いますが、開業はまた趣が異なります。起業家(Entrepreneur)としてクリニックという「事

業」を経営しなければなりません。新鮮かつ魅力的な分野であると同時にプレッシャーもあります。「お金なんて、商売なんて」と思う時もありますが、やはり謙虚に利益を考え、財務表に目を凝らしている日々です。ただ普通の商売よりは明らかに優遇されています。日本はアメリカと比べると医療に関しては社会主義的な構造を持った国です。国民皆保険は医者を守る仕組みでもあるからです。この仕組みがあるからこそ日本の医療の質は世界に冠たるものとして発達して来れたと同時に、医師が比較的裕福な生活ができる理由だと思えます。

クリニックの名前についてはいろいろ悩みました。島尻医院は与那原にありましたが、島尻内科、島尻内科クリニック、、、浦添にあるのに島尻地方にあると間違われても嫌です。それに何だかパッとしないような気がしました。東京にある先輩のクリニックが「駅前つのだクリニック」と言い、場所と医師の名前を瞬時に判断できます。パクっても良いか尋ねると快く承諾してくれました。しかし目の前に駅はありません。浦添市の地図を広げると、勢理客から牧港まではキャンプキンザーが横たわっています。浦添は実は基地の街でした。政治的な問題から少しのためらいはあるものの既に返還も決まっ

ているらしく、本土の友人にも基地のある街で開業していることを知ってもらいたい、また基地と隣り合わせに住んでいる浦添の皆さんに親しめるクリニックにしたいと思ってこの名前にしました。

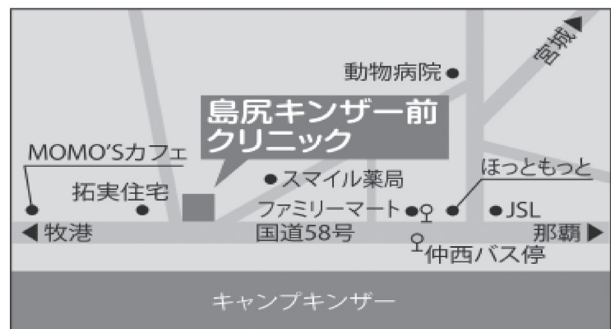
行きあたりばつたりに進めてきた、と言うのが本音の私の開業顛末です。ただ人生の一大転換期ではありました。そんな物事が大きく変わっていくなかで精神的に参考にしていた本の話で締めくくりたいと思います¹⁾。今年の干支の龍の話です。龍は地中に潜み、ある日飛び立ち天に昇り、雨雲を従え恵みの雨を降らせると言います。陰徳を持ちできるだけながく飛び続けること、そのためには何かに頭を隠す必要があると言います。自分が属する職場や地域に埋没し、我を通すことなく自分を発揮することができれば、すなわち組織と一体化することができれば、ながく飛ぶことができると私は解釈しています。学問を愛し、今まで育てていただいた先生方の師恩に報いたいという気持ちで日々過ごしています。

参考文献

- 1) 竹村亜希子著、リーダーの易経、PHP 研究所、2005年9月5日発行



外観風景



地図